人類史上、負の歴史を継承することは重要ではあるが、 それに伴う課題も多々ある。例えば、第二次世界大戦 の語り部活動や、広島の原爆ドームのような負の遺産 の保存が決まったのも終戦後何十年もかかった。「3.11 」という災害の負の歴史の伝える手法の課題も数多くあ り、同じような災害が二度と起こらないように東日本大震 災の記憶を伝える人もいれば、「震災遺構」となった被 害を被った建物をもはや見たくない或いは、語り部の話 により大震災のつらい経験を思い出したくない人もいる。 同震災は地震・津波といった自然現象による被害だけ でなく、原子力発電所の事という放射能による被害が社 会に対し大きな影響をあたえた。東日本大震災と一括り にされがちであるが、津波の被害が大きかった宮城県 や岩手県と原子力災害という目に見えないリスクとスティ グマを背負った福島県との相違認識も必要である。例 えば、前者は語り部が多いものの、後者では語り部が 少ないなどの課題がある。当シンポジウムでは、東日 本大震災という日本史上でも稀なナショナル・クライシ スの記憶、伝承という課題を考察、討議する。その記 憶形成、伝承の具体的ツールとして、被災地での紙芝 居上演、デジタル・アーカイブスを検証する。

### セッション 1 (9:00am-10:40am) 文化的記憶と物で語る

- 蘭 信三 (上智大学、 大和大学)『戦争体験、 植民地体験という困難ーいかに語られ、 いかに継承されてきたか?』
- アンドルー・ゴードン (ハーバード大学) オンライン参加『韻を踏む災害の歴史:足尾銅山と福島第一』
- 森本 凉(プリンストン大学) オンライン参加『悪魔のアーカイブ、又は東京電力のお墓の建て方』

### セッション 2 (10:50am-12:20pm) 記憶の伝承と表現

- 佐藤翔輔(東北大学災害科学国際研究所)『我が国における災害語り部活動の現状:災禍を伝える東北とそれ以外の
- アンナ・ヴィーマン(LMU ミュンヘン大学) オンライン参加『語り部と Zeitzeugen。 歴史の伝承活動』
- ゲルスタ・ユリア (東北大学災害科学国際研究所)『岩手、宮城と福島で見えてくる東日本大震災を語り継ぐ課題』
- 1:00pm 2:00pm 震災紙芝居上演:村上美保子、村上哲夫/進行:紙芝居作 家 いくまさ鉄平

### セッション 3 (2:10pm-3:40 pm) 紙芝居 の歴史的考察とデジタルアーカイブス

- 山本武利 (NPO 法人インテリジェンス研究所) 『プロパガンダ紙芝居』
- シャラリン・オルバー (ブリチッシュコロンビア大学)オンライン参加『国民に戦争を売る:プロパガンダ紙芝居 のストーリー展開』
- 上田薫(スタンフォード大学フーバー研究所)『紙芝居のデジタル化:グループ消費から個人の経験へ』

### ディスカッション: 4:00 pm- 5:00 pm

- 08:30 仙台駅(東口アンパンマン像前集合)
- 10:30 震災遺構 浪江町立請戸小学校視察 紙芝居上演 「奇跡の避難 浪江請戸小学校物語」 浪江まち物語つたえ隊による上演
- 11:30 いこいの村なみえ(浪江町)にて浪江まち物語つたえ隊による 震災紙芝居上演「浪江消防団物語無念」「見えない雲の下で」
- 13:30 いこいの村なみえ(浪江町)出発
- 14:00 帰還困難区域 浪江町津島地区視察
- 15:00 震災紙芝居上演「浪江ちち牛物語」
- 15:30 浪江町津島地区発
- 17:30 仙台駅着

※定員になり次第、締め切ります。申込はホームページからお願い します。バス代は東北大学が負担しますが昼食や施設入場料など実費につい

ては参加者の負担となります。(2000円程度)







問合せ先:(一社) まち物語制作委員会 福本 TEL090-9734-9389 E-mail:ikumasa.teppei@gmail.com





東北大学災害科学国際研究所(IRIDeS)、 スタンフォード大学共同企画

# 負の歴史の伝承シンポジウム

主催:東北大学 災害科学国際研究所、共催:スタンフォード大学フーバー研究所、

協力:(一社)まち物語制作委員会、浪江まち物語つたえ隊



## 第一部:学術発表とシンポジウム

とき:9月23日(土)午前9時から午後5時

ところ:東北大学 災害科学国際研究所 (宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1)

※定員になり次第、締め切ります。申込は専用サイトからお願いします。なお会場周辺には食堂がありませ ん。お弁当をご希望の方は8月31日までにお申込みください。

### 第2部: ワーキングスタディ 9/9



とき:9月24日(日)午前8時半から午後5時半

内容:福島県双葉郡浪江町周り、震災現場にて被災者が語る震災紙芝居の上演を鑑賞します。

※定員になり次第、締め切ります。申込はホームページからお願いします。 申し込み 締め切り:8月31日。バス代は東北大学が負担しますが昼食や施設入場料など実 費については参加者の負担となります。(2000円程度)



### シンポジウム発表者の略歴

**蘭信三**:大和大学教授、上智大学名誉教授。歴史社会学、戦争社会学専攻。主な著書に『「満州移民」の歴史社会学』(行路社:1994年)。共編著に『戦争と性暴力の比較史に向けて』(岩波書店;2018年)、『引揚・追放・残留』(名古屋大学出版会;2019年)、『なぜ戦争体験を継承するのか?』(みずき書林;2021年)、『帝国のはざまを生きる』(みずき書林;2022年)がある。

アンドルー・ゴードン: ハーバード大学歴史学部教授。主に日本の近代史を研究、著者には労働史、近代消費者の出現や広範囲で使用されている教科書『日本の近代史』(日本の 200 年) がある。2011 年 3 月 11 日の複合災害に焦点を当てた「日本災害デジタルアーカイブ」をハーバード大学で共同作成した。

**森本 凉**: プリンストン大学人類学助教授。核と人間、そして人間以外の他者との間の移り変わる関係を探求する。 著書に『Nuclear Ghost: Atomic Livelihoods in Fukushima's Gray Zone』。ニュークリア・プリンストンプロジェクト 代表。

佐藤 翔輔: 東北大学災害科学国際研究所准教授。京都大学大学院博士後期課程修了(2011)、博士(情報学)。 東北大学助教を経て,2017年より現職。令和3年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞(実証研究と 技術支援に基づく効果的な震災伝承に関する研究)などを受賞。

**アンナ・ヴィーマン**: ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン助教。ルール大学ボーフムで日本語学とフランス文学・言語学の学士号、フィリップス大学マールブルクで平和・紛争研究の修士号、ハンブルク大学で日本研究の博士号を取得。ハンブルク大学日本研究講師、ハインリッヒ・ハイネ大学デュッセルドルフでリサーチ・アソシエイトを歴任した。研究分野は日本の市民社会・社会運動や災害の集合的記憶など。

ゲルスタ・ユリア: 東北大学災害科学国際研究所(IRIDeS)災害文化・デジタルアーカイブ研究部門助教。3.11後のコミュニティ再建における地域文化の役割に関する論文で、ベルリン自由大学にて日本研究の博士号を取得。研究テーマは、災害文化と集合的記憶、(負の)遺産保存、ナラティブとストーリーテリング、社会復興。

いくまさ鉄平 (本名:福本英伸):紙芝居作家、一般社団法人まち物語制作委員会 代表理事、東日本大震災の復興支援として震災後から被災地の物語を紙芝居にして届ける活動を続ける。被災者に届けた紙芝居は 170 本以上に達し、その内、震災や原発事故に関係する紙芝居は 70 作品に達する。福島では 10 以上のグループが結成され、語り部活動に活用している。

山本武利: 早稲田大学名誉教授、インテリジェンス研究所創設者。主な著書に『占領期メディア分析』(1996年)、『紙芝居―街角のメディア』(2000年)、『朝日新聞の中国侵略』(2011年)、『陸軍中野学校―「秘密工作員」養成機関の実像』(2017年)など。

シャラリン・オルバー: ブリティッシュ・コロンビア大学現代日本文学教授、アジア研究学科長。2015年の著書『Propaganda Performed:日本の15年戦争における紙芝居』は、1930年代から1940年代の日本における紙芝居の歴史と分析を提供している。

上田薫:スタンフォード大学フーバー研究所ライブラリー&アーカイブスのリサーチフェロー兼日本ディアスポラ・コレクション・キュレーター。対面、オンライン展示、邦字新聞デジタル・コレクション (http://hojishinbun.hoover.org)、アーカイブ文書収集、その利用の促進を手掛ける。編著には「炎を扇ぐ:近代日本のプロパガンダ」(2021)がある。

### 上演紙芝居 (予定)

9/23上演

命の次に 大切なもの



大地震の後には津波が襲ってくることを知る相馬の漁師。 命の次に大切な船を守るため沖に船を出す。 翌朝、 港に帰ってみるとそこには町はなかった。 すべてを失って気付いた命の次に大切なものとは?

9/23上演

朝日館 女将の7DAY



魚がおいしいことで関東圏にも知られる新地町の釣りの浜。その魚を目当てに全国各地から旅館朝日館に押し寄せた。そんな名門旅館も大津波は容赦しなかった。津波体験のある女将は危険を感じいち早く逃げることを決断。逃げようとしない人に必死で声掛けし多くの人の命を救う。地震、津波、原発事故と未曾有の被害の中、生き延びた女将の7日間。

9/24上演

請戸小学校 奇跡の避難物語



津波到達まで 50 分。それは海から 500m の浪江町請戸小学校の児童を逃がすに残された時間でもあった。安全地帯まで約 5 キロ、小学2年から6 年までの 77 人の子供たちを誘導する先生は一人の犠牲も出すことなく逃げ切った。請戸小学校、奇跡の避難物語。

9/24上演

見えない雪の下で



3月 11 日以降始まった避難生活。震災前、浪江町で民話の語り部活動をしていた故佐々 木ヤス子さんは桑折町の避難所にいた。その人は避難を綴った随筆「恐ろしい放射能の下で」 を自費出版し、避難所で出会う人に配布していた。その本を元に紙芝居にしたのが鉄平が初め ての震災紙芝居「見えない雲の下で」である。

9/24上演

浪江消防団物語 「無念」



地震発生、津波到達により壊滅状態となった浪江町の請戸地区。しかしそこには助けを 求める命があった。余震、津波の恐れがある中、消防団は翌朝、日の出とともに救助に 来ることを約束し、一旦撤収する。そこに発生した原発事故、消防団自身も避難を余儀 なくされた。助けられた命があることを知りながらの避難、無念は何年たっても消えない。

9/24上演

浪江ちち牛物語



原発事故により殺処分命令が出た福島の牛たち。安楽死させられた牛たちの数は福島県下で3447頭。機械的に処分されたと捉える人は多いが、そこには精神を病むほど悩み苦しむ酪農家がいた。牛目線で酪農家の姿を伝える。

#### <浪江まち物語つたえ隊>

2012 (平成 24) 年、当時仮設住宅で暮らしていた浪江町民及び避難先の桑折町民で結成。 浪江町民はいくまさ氏が制作する紙芝居で、帰れぬ故郷を想い、その歴史、東日本大震災のこと、原子力発電所の事故のこと、その後の暮らし、それ以前の暮らしを語り継ぐこととし、浪江町に伝わる昔話や震災時の実話をもとにした紙芝居、アニメーションを制作する。 作品の上演会や上映会を日本のみならず海外でも開催することで、 浪江町内外の親交を深め、 ふるさとの記憶や震災の記憶を風化させまいと日々活動を続けている。 24 日スタディツアーでは当会の八島妃彩さん、 岡洋子さん、 石井絹江さんが紙芝居を上演します。

### シンポジウム (S / 23) 会場 東北大学 災害科学国際研究所

仙台駅から

仙台市営地下鉄東西線 八木山動物公園行き 「青葉山」駅下車「南1」出口から出て正面 のキャンパスモールを右へ徒歩約3分

スタディツアー(9 / 24)集合場所 JR 仙台駅東口 アンパンマン像前